

# ウミネコ留学——島で大きく成長して巣立っていく子どもたち

ウミネコ留学制度実施委員会

## ● 甌島でしかない体験を子どもたちに

「ウミネコ留学制度」の始まりは、少子高齢化による人口減少に端を発している。平成七年の国勢調査で鹿島村(当時)の人口が千人を切った。小学生四九人、中学生一九人が在学していたが、「来春、入学する小学生が一人もいない。入学式がなくなるのは寂しい」との危機感から、村当局の発案により同年一二月一四日に「ウミネコ留学制度実施委員会規程」を制定し、翌年一月から留学生の募集を開始した。留学名称は、鹿島断崖で春に生まれたウミネコ幼鳥が、成長し巣立っていくのにちなんで命名されたものである。また、留学生にウミネコの餌付けや、艀漕ぎ舟など鹿島地区でしかできない体験をしてもらおうとの狙いもあった。

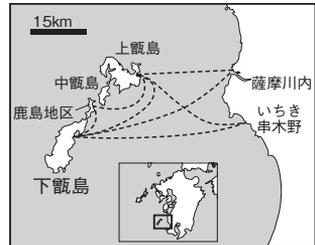


マダイの放流体験。

初年度(平成八年度)は、新一年生を含む一七名の留学生を受け入れることができ、心配されていた鹿島小学校の入学式は無事に挙行された。

それ以降も同小学校の入学式は、途切れることなく行われている。

平成二七年度で二〇年を迎えた留学制度であるが、これまでに二二八名の留学生が巣立っている。本年度は、二世帯の家族(親子)留学を含め、計七名のウミネコ留学生が鹿島小学校に



下甌島：薩摩半島の西約45kmの東シナ海にある甌島列島の南部に位置する島。面積66.29km<sup>2</sup>、周囲84.8km、人口2,334人(平成28年4月1日現在)。好漁場にめぐまれ、定置網、一本釣りなどによる高級魚の水揚げも多い。島の北部が鹿島町、南部が下甌町。

## 雄大な自然と恐竜の化石で有名な下甌島の鹿島地区

薩摩川内市鹿島町は、鹿児島県本土から約30キロメートル離れた甌列島の中部（下甌島の北端）に位置する人口450人あまりの地域である。

鹿島地区は、明治22年4月に町村制が施行された際には、同年10月1日より、下甌村・蘭牟田地区として発足した。しかし、村役場の所在地である手打地区との間が、陸路・海路ともに遠距離であり、用務を満たすには往復で2泊3日を要するなど不便が大きく、下甌村からの分村要求が繰り返行われてきた。大正5年には分村の陳情、昭和21年には、分村請願書が提出されるなどして、同24年4月より鹿島村として独立発足した。

その後、平成の大合併により、離島を含む合併で注目され、県内第1号として1市4町4村が合併し、平成16年10月12日に薩摩川内市が誕生した。ちなみに、現在では、道路、トンネルなどの開通により、手打地区までは車で片道40分の距離となった。

鹿島地区西部には、ウミネコが越冬、繁殖する鹿島断崖があり、夜萩円山公園からその一部を見ることができる。この公園は、鹿島断崖の北端に位置する高さ約170メートルの断崖の、約8000万年前の白亜系姫浦層群の連続した地層が観測できる場所として、学術的にも貴重である。

また、ここから東に位置する鳥ノ巣山展望所は、眼下に東シナ海、蘭牟田瀬戸海峡を眺望でき、7月には、薩摩川内市の市花であるカノコユリの群生が見ら



高さ100m以上の切り立った断崖が約16km連なる鹿島断崖。

れることから、観光の名所となっている。このような手つかずの自然が評価され、甌島は、平成27年3月に国定公園に指定された。なお、同海峡では、中甌島と下甌島をつなぐ蘭牟田瀬戸架橋の建設も進んでおり、これが完成すると甌島列島が車で縦断できるようになる。長年の夢であった“甌はひとつ”になるのもそう遠いことではなくなった。

鹿島地区では、平成20年3月に、鹿児島県で初めての恐竜化石として獣脚類恐竜類（肉食恐竜）の歯と肋骨が見つかった。ほかにも国内初の角竜類恐竜（植肉食恐竜）ケラトプス類の歯や竜脚類恐竜（同）の歯などさまざまな化石が相次いで発見されている。同27年には鹿島支所内に「甌ミュージアム準備室」をオープンし、これらを活かした町の活性化に地区一丸となって取り組んでおり、島内外からの小中学生を対象とした化石発掘体験事業なども企画実施している。同準備室には、鹿島地区を中心に、甌島で見つかった恐竜など陸の生き物の化石や、アンモナイトや二枚貝など海の生き物の化石を展示している。

通っている。留学制度により、学校の存続はもちろん、ウミニコ留学生と鹿島地域の児童・生徒との交流による教育効果の向上もみられている。

### ● 県の事業を活用した留学制度

ウミニコ留学制度実施委員会は、地区内で留学生を預かる里親を募り、里親に対し、委託制度の下で依頼している。



明るく、躍動する鹿島小学校の子どもたち。

委託料は、月六万円。保護者（実親）

の経済的負担を軽減するため、薩摩川内市がその半額を補助している。

また、「家族（親子留学）」や、「孫戻し留学」（島の祖母のもとに寄宿し通学する）もあり、これらに対しても市から三万円の補助がある。

初年度は、村単独での委託事業で

あったが、現在は、鹿児島県の単独ソフト事業「特定離島ふるさとおこし推進事業」を活用し、事業額の七割補助を受けて実施している。

一年間留学して、さらに次年度以降も希望する場合は、継続が可能であり、その際、委託料も継続して支給される。鹿島小学校を卒業した留学生については、引き続き中学校への進学も認められている。ただし、現在、鹿島中学校は休校中のため、スクールバスで下甕地区（しもしほ）の海星中学校へ通学することになる。

ウミニコ留学生の受け入れについては、毎年、鹿島小学校に転入学する全国の小学一年生から六年生までを対象に達していない。鹿児島県の他の離島でも離島留学制度を実施しており、重複して応募する例が見受けられ、広報の方法（新しい広報媒体など）の模索、募集期間の再検討など、実施委員会でのさらなる協議が必要である。また、里親を引き受ける人数が減少しており、このままでは、留学制度の維持が困難になると危惧され、新たな里親制度を構築する必要を感じている。

### ● 子どもたちと地域の活力のために

留学生を受け入れている鹿島小学校では、「ウミニコとカノコユリと恐竜の里」をキャッチフレーズに、明るい、

## ◆学校からみた離島留学◆

制定から21年が経過した薩摩川内市立鹿島小学校のウミネコ留学制度により、235名（現在通学中の児童含む）が本校に転入学し、地元の子どもたちと学校生活をともにしてきました。同留学制度は、鹿島地域の里親の方々には生活を支えていただき通学する里親留学と、児童の父母も鹿島地域に同行して生活をともにしながら通学する家族（親子）留学があります。それら留學生の出身地はさまざまで、平成28年度は、鹿児島県内からの留學生はおらず、神奈川県、愛知県、福岡県、熊本県の4県から、1年生から6年生までの計7名が通学し、地元の11名の児童とともに目を輝かせて学校生活を楽しんでいます。

留學生やその保護者が、本校での留學生生活を希望されるのは、自然豊かな島の地でのびのびと生活したい（させたい）という理由が第一のようです。現在、学校は完全複式の3学級編制。幼稚園も併設され、学校・幼稚園の敷地内には、子どもたちの元気で明るい声がこだましています。小学校の各学級5～7名での生活は、きめ細やかな指導が個に応じて行われ、一人一人を大切に学習活動によって確かな力を身につけられるのも魅力です。少人数の生活は、個々の責任感も強まり、学校独自で行う異年齢の集団活動などによって社会性や協調性も培われます。

また留学希望者からは、本校の特性である「地域に根ざした教育」を行っていることも大きいとかがいます。海洋型の体験活動の数々は鹿島小学校の代名詞とも称され、漁船を使ったウミネコの餌付け体験や定置網引揚げの活動をはじめ、ところてんの材料である天草採り体験など、海や海の恵みを素材にした内容を教育課程に位置づけています。子どもたちの心や体をたくましく成長させてくれるこうした体験活動は、PTA組織や地域コミュニティーの組織的な協力体制によって運営され、地域と学校が一体となって取り組まれています。

過疎化する離島の小さな漁村に、温かい人の心が通い合い、子どもたちが純粋な心を保って生活できる場があることは、そのすべてが鹿島の宝であるといえるでしょう。

（薩摩川内市立鹿島小学校 校長 徳石秀二）

躍動する学校づくりを目指している。地元の子どもたちと一緒に行う天草採り、ウミネコの餌づけや漁師さんの指導による定置網漁の海洋型体験の実施などは、鹿島ならではの学習といえる。都会では、TVゲームなど一人遊びが多いが、ここでは、ほとんどそういったことがない。全校児童が一緒に男女・学年関係なく外でふれあうことのほうが

多く、地元の子ども、留學生関係なく仲良く過ごしている。地域の方々も自分の子・孫のように留學生に接しており、外で出会えば必ず挨拶が交わされている。このような環境で育った、ウミネコ留學生は、鹿島を決して忘れることなく、折に触れ「帰省」し、里親宅で過ごしたり、友だちの家に泊めてもらったりしている。



ウミネコの餌付け体験。

ウミネコの幼鳥がここ鹿島で立派に育ち巣立っていくように、ウミネコ留学生も一年で心身ともに大きく成長してそれぞれの出身地へと帰っていく。全国的に少子高齢化が進むなか、留学生の確保も年々困難になることが懸念されるが、明るい学校づくり、活力ある地域づくりのため、子どもたちの笑顔や賑やかな声を絶やさないことが、私たち地域住民に課せられた責務と考えている。

### ◆里親からみた離島留学◆

私は、ウミネコ留学制度実施委員会の会長を務めるとともに、里親として留学生を預かっております。鹿島小学校の児童数の減少に端を発したこの事業の立ち上げに、当初から村役場職員として携わってまいりました。

同制度の設立にあたっては、初めての試みでもあり、里親として留学生を受け入れてくれる家族があるか、また、実親も離島での生活に、はたして安心して子どもを預けてくれるかなど、いろいろな心配がありました。

当時、鹿島村には村立の小学校・中学校がともに一校。近い将来子どもたちが減少してさびれていくのではないかと危機感を抱き、どうしても留学制度を立ち上げなければならないと思いました。発足してからも、里親の担い手不足や留学希望者の減少など紆余曲折ありましたが、20年以上経過し、ようやく定着したと実感しております。

わが家も里親として、平成16年度から留学生を受け入れてまいりました。遠くは群馬県からの留学生、多いときは同時に3人を受け入れ、すでに26人がわが家を巣立っていきました。現在も1人の留学生を受け入れております。

その中には、出身地でいじめを受けていた子どもなど、さまざまな理由のため留学をさせる実親もありました。その子どもたちも、学校や地域の方々の協力、里親の家庭での教育、自身の努力により、立ち直って巣立っていきました。いまでは立派な社会人となっています。

大きく成長した留学生の姿を見ると、里親としてなんとか責任を果たすことができたという満足感があり、とても嬉しい気持ちになります。

これからも、留学生の成長を楽しみに、また、鹿島小学校がいつまでも存続することを願い、引き続き里親として子どもたちを受け入れてまいりたいと思います。

(ウミネコ留学制度実施委員会 会長 中野重洋)

子どもたちのためにも、地域のためにも、ここ鹿島でしか体験できないことがたくさんあるこのウミネコ留学制度が、三〇年、四〇年と続いていくことを願っている。

## ◆留学生からみた離島留学①◆

それは、母親が小さな新聞の記事を見つけたことから始まった。記事の内容は、親元を離れ、漁村で1年を過ごす「ウミネコ留学生」の第1期生を募集するというものだった。当時、私たちは横浜に暮らしていたが、父母ともに「きっと良い経験になる」と背中を押してくれた。父親が五島列島で育ったこともその大きな要因だったと思う。こうして中学1年生となる私と、小学校5年生になる妹の2人の留学が決まった（※当時は鹿島中学校があり、留学を実施していた）。

下甕島の鹿島村で過ごした1年間に思いを馳せると、数々の映像がいまだ鮮やかに浮かんでくる。見たこともない蒼さと透明度を誇る海と、その中を泳ぐ色鮮やかな魚たち。島の上を吹き抜けていく潮風の力強さ。最初はほんのりと白く、突然正視できないほど眩しく輝き出す朝日。水平線に沈む夕陽が刻々と変える空の色。夜空一面に輝く星々。大自然の威厳と美しさに心奪われ、暇な時、泣きたい時、何かにつけ海岸に足を運び、時間を忘れていつまでも眺めていたことを思い出す。

島での生活は、とにかく人と人との距離が近いのが印象的だった。すれ違う人は、必ず挨拶をする。先輩のことは「兄ちゃん」「姉ちゃん」と呼ぶ。明るく働き者のおばあちゃんたちは、日焼けした頬をにっこりさせながら、そばを通るたびに「いま帰り？」と、声をかけてくれた。近所のおばあちゃんがよくつくってくれた紫芋の甘いコロッケや、ガネンテ（蟹の足に似た芋の揚げ物）の味を今でも思い出す。

当時ほど規則正しく、一心に勉強や部活に打ち込んだ日々はなかった。お茶目だけど生活態度やマナーに関しては、本当に厳しかった里親のおっちゃん、おばちゃん。彼らの指導により、いままで親に甘えていた私に、自分のことは自分でやる習慣が身についた。村に1校の中学校は全校生徒28名。部活はバレー部しかなく、毎日全員で練習に参加した。厳しい練習メニューを必死にこなすことで、仲間の結束は強くなった。とくに女子同士は、まるで戦友のようだ。ヘトヘトになって家で食べるご飯は猛烈に美味しく、疲れ果てて良く眠れた。

留学生活を通して、私は大自然の偉大さ、人と人との距離が近いことの素晴らしさ、規律正しい生活の心地よさ、逃げずに自分自身や人と向き合うしんどさを解決したときの感動、そして両親への感謝を学んだ。

あれから20年、2児（もうすぐ3児）の母となり、あらためて実感するのは、子を送り出す親も、親元を離れる子も、迎える里親も、みんな勇気が必要だということ。もし何かがあったら……。その心配は、愛情であり、責任感である。しかし、子どもの人生すべてに親がついていけるわけではない。子が自分の足で立ち、自身の頭で考えて行動していくことが、その子の財産となっていく。いま思うと、両親や里親さん、島の人のための大きな信頼と愛情があったからこそその留学生活だったと、頭が下がる。鹿島での1年は、いまま私の財産だ。

（ウミネコ留学第1期生 渡辺敏江）

## ◆留学生からみた離島留学②◆

私は、いまから19年前にウミネコ留学生2期生として、中学3年生の1年間に里親さんのもと、鹿島で過ごしました。

ウミネコ留学を終えてからも学生のうちは、時間を見つけては島へ遊びに帰っていましたが、就職など生活の変化とともに島へ行く機会は減っていきました。結婚を契機に、中国での生活となったため、なかなか島へ帰ることができなくなりましたが、当時お世話になっていた里親さんとはずっと連絡を取り合っており、いまでも本当の親のように接していただいています。思えば、当時思春期だった私と突然一緒に暮らすことになり、大変な気苦労があったのではないかと思います。それでも実の子のようによくしていただき、本当に感謝しています。

今年、5年ぶりに島へ帰省しました。80歳を過ぎ高齢となった里親さんに3歳になる娘を紹介すること、そして自然とは遠い環境で生活している私の娘に島の雄大な自然を体験させることが目的でした。娘は、初めての海水浴や貝殻拾いに夢中になりました。

今回は、ウミネコ留学時代から仲良くしていた鹿島の友人がちょうど帰省するタイミングだったので、彼女の自宅に泊めていただきました。当時中学生だった私と友人が、お互い子どもを連れて再会するというのは、感慨深いものでした。

母親になって、あらためて子どもにはたくさんの自然とふれあって育ててほしい、人々の温かさにもふれ、それを学んでほしい、という思いを強くしました。娘が楽しそうに島で過ごしている姿を見て、親子2代でウミネコ留学生として島へ戻ってくるのもいいかな、という気持ちにもなりました。

島を離れても、ふとした瞬間に思い出す島はいつも美しく、島の人々はいつも私を応援してくれているような気がします。島で得た友人たち、経験や思い出は、その後の人生において、大きな心の支えとなりました。また、大人になってからも里親さんと島とつながり、新たな思い出を増やしていくことのできるウミネコ留学制度に大変感謝しています。

(ウミネコ留学第2期生 野口槇子)



7月にはカノコユリの群生を見ることができる。